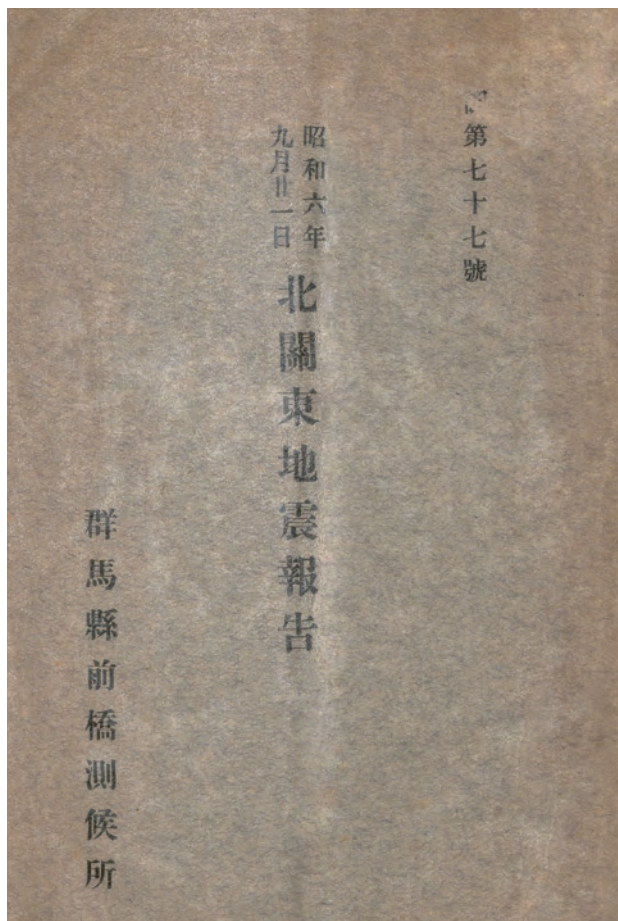


昭和六年
九月廿一日

北關東地震報告

復刊版



群馬地域文化振興会

第七十七號

昭和六年
九月廿一日

北關東地震報告

群馬縣前橋測候所

北關東地震報告正誤表

[illegible]

天變地異は人爲を以てしては絶對安全の對抗を許さない、併し之が災害を輕減することは科學の進歩せる現今に於ては之を成し得る。只之を能くする設備と其人を要する。

去月廿一日の地震は實に本縣民に一の恐威を與へた。之を北關東地震と名付けて諸般の報告を纏め、一つは緊張の心を養ひ、一つは紀念として机上に備ふ可く、篤學の士には研究の資となさんとす。

内容は固より平易にして頗る低級のものたるは、主として縣下一般の士に讀破せられん事を希ふもの、あつて、敢て中央の學者の研究資料となすが爲めのものではない。

併しながら氣象臺始め各測候所及縣下各町村が資材の供給に御努力下さつた事は特に感謝する所であると同時に、其材料は貴重たる資格を失ふものでは無い。故に貧弱なるものではあるが御閱讀の榮を得ば本懷是に過ぎざる次第である。

昭和六年十月廿七日

群馬縣前橋測候所長

室 伏 万 吉

北關東地震報告目次

報告概要	一頁
------	----

主震	二
----	---

管内各地の主震	三
---------	---

餘震	五
----	---

被害調査	一三
------	----

被害統計	二〇
------	----

被害分布と地質	二八
---------	----

被害建築物	二九
-------	----

各測候所の観測	三〇
---------	----

震度の分布	三二
-------	----

震源探査	三三
------	----

附 録

地震は如何にして調査するか	三四頁
---------------	-----

各種地震計の機能	三五
----------	----

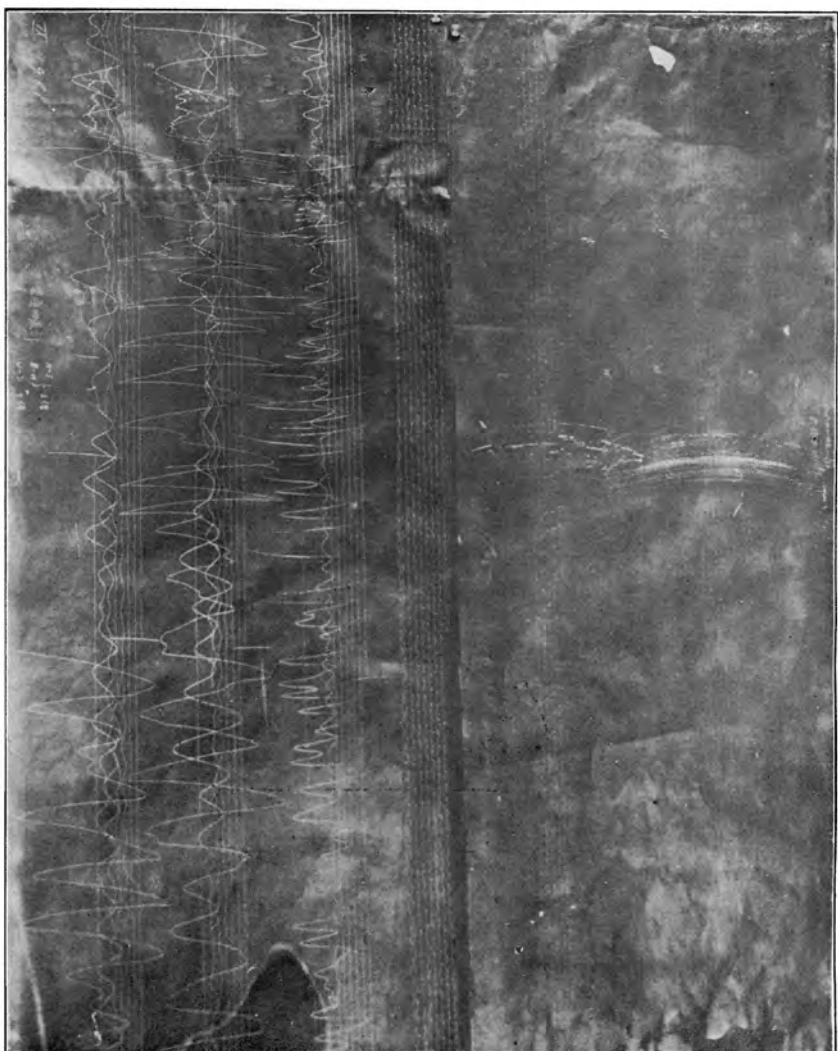
地震動の強さ及大さ	三六
-----------	----

地震の種類類	三七
--------	----

震災は如何にして軽減するか	三八
---------------	----

地震に關する心得	三九
----------	----

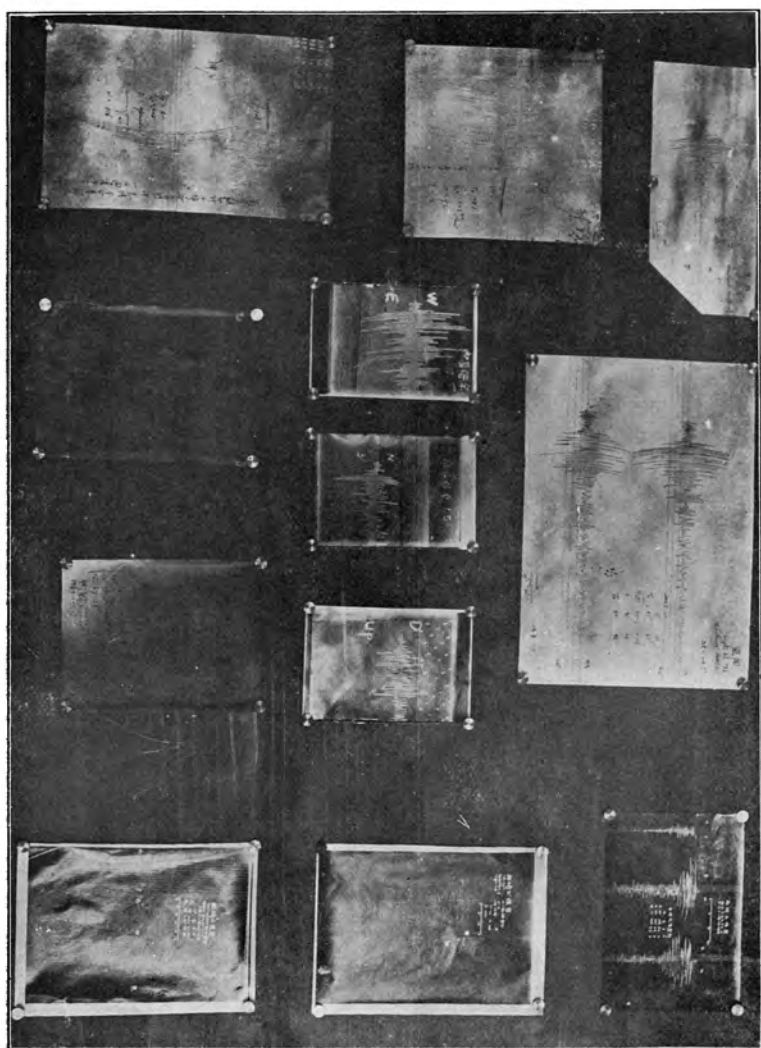
第一節 地震現象圖



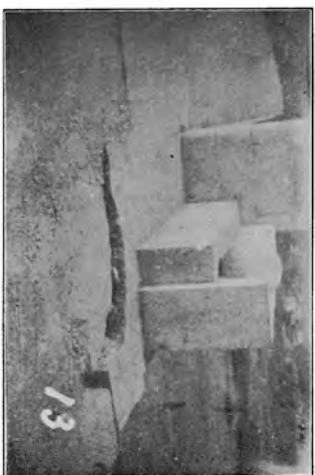
大森式百倍微動計

同上普通地震計

圖二 他縣測候所地震記象



震 災 三 寫 眞 圖



第
四
圖



震
災
寫
眞



第五圖 震災寫真



眞

寫

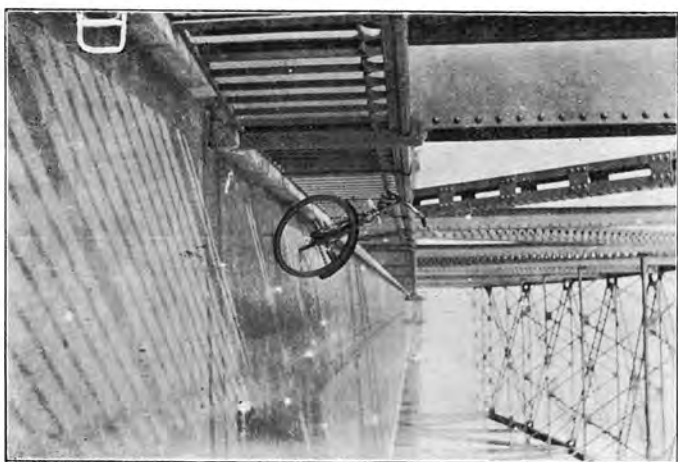
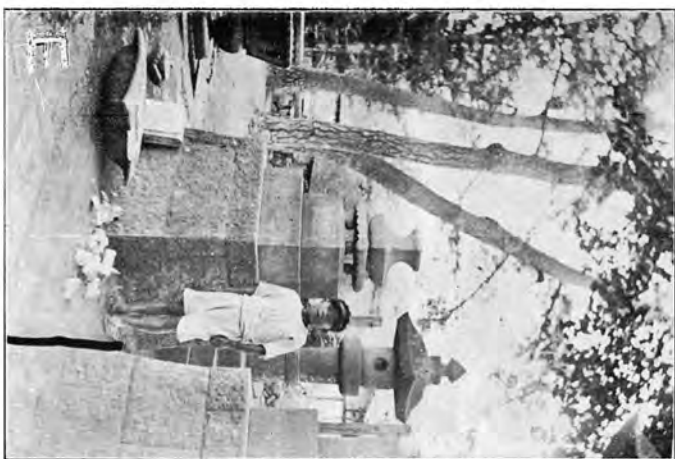
圖

六

災

第

震



震 災 第 七 寫 真 圖



北 關 東 地 震 報 告

昭和六年九月廿一日十一時廿分四秒に本縣を震撼せしめた強震は埼玉縣荒川上流域（詳しく云へば氣象臺發表の同縣仙元山）に發したものであつて大正五年縣下吾妻郡に起つた強震又同十二年九月一日の關東大地震に比すれば本縣は遙かに其被害は多かつた勿論地震其者の勢力は關東大地震、但馬地震並に北丹烈震、近くは北伊豆地震等に比すべきものでは無かつたが、震央が本縣に接し且其距離が近かつた爲めである。

此地震は何等前震の兆なく突發したもので其性質は北伊豆地震と其趣を異にし、關東大地震、但馬及北丹地震と酷似して居る。併しながら某學者の如く論ずれば、伊豆地震の北上して富士山麓を脅し尙ほ延長して相模甲斐の國境となり而して今回の地震となつたと説けば、所謂廣義の理論であつて、其前震が無かつたとは云へない、以上の地震が皆今回の地震の前震とも云へ様、併しながら同一地點（少くも其附近）に震央を有する地震に就て見れば慥かに其前震を伺ふ所がない。仍て吾人は突發した斷層地震（地塊運動）と解して居る。隨て何等火山性の地震を帯びて居らないと云ふことも明かである、故に主震後頻發せる地震は、所謂餘震であつて新に來る可き強震の前提と見ることは出来ない。是即ち北伊豆地震と其性質を異にして居ると云ふ所以である。